

老人性平衡障害

年を取ると、足元が危なくなる。80歳を過ぎると、約半数の人はふらつきを感じるという。医者はその治療に難渋する。

82歳のTさん。だいぶ前から、歩くたびにふらつく。転びはしないが、まっすぐ歩いていないように感じる。階段を降りるのが「わい」「ひょっこ」と頭の病気で「もっ」と訴える。

耳鼻科では、難聴以外に異常はなかったという。が、脳の症状もみられない。例えば、**田律**が回りにくくなる構音障害とか、手足がうまく動かせなくなる小脳症状もない。明らかなのは、年齢以上に握力が低下していること。片足立ちができていないこと、**へらご**である。

検査をしないと納得してつれないので、MRI（磁気共鳴画像）で頭を調べる。が、予想通り、Tさんの脳には、めまいやふらつきの原因になりそうな異常はない。ただし、脳萎縮と症状の出ない脳梗塞はある。MRI A（磁気共鳴血管画像）でも、軽度の動脈硬化がみられる。が、それらはとむせ、

加齢に伴うものである。というので、Tさんのふらつきは、加齢による「老人性平衡障害」という診断になる。

めまいやふらつきは、身体の平衡感覚に障害が起こった時の症状だ。平衡感覚の維持には、目、耳、筋肉、関節、脳・神経などの正常な働きが必要である。だが、加齢によって、その平衡感覚に関係する部位の働きが少しずつ落ちてくる。しかも、各器官の障害がさまざまに絡み合っているのである。で、治療はチョー難しい。

と、説明すると、Tさんはすかさず、「センセ。この頃の医者は、すぐ加齢のせいにする。が、もう、カレイヤカシューも、食い飽きたのですが」と返してくるではないか。加齢がいやならラメか、それともハヤシライスが良いのか。と、ボンクラ頭には、すべてには良い知恵は浮かばない。

（石黒修三「いしへろくりニック・脳神

経外科医」12/26 北國新聞掲載）